

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2016

課題番号：24720291

研究課題名(和文) 中世禅宗寺院における農業知識に関する研究 抄物史料の活用を通して

研究課題名(英文) Study on Agricultural Knowledge in Zen Temples of medieval Japan

研究代表者

川本 慎自 (Kawamoto, Shinji)

東京大学・史料編纂所・准教授

研究者番号：30323661

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：中世後期の社会経済において五山系禅宗寺院は幕府財政や荘園支配などに大きな役割を果たしたことが知られるが、その基礎の一つとなる農業知識がいかに禅宗寺院において形成・伝達されたか、その様相と構造を考察した。禅宗寺院においては儒学・漢学の講義が多く行われたが、その中で副次的に数学や医学などの科学的知識や文学や芸能などの実用的知識が伝達されており、そうした知識の中に農業や本草の知識も含まれることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：It is known that Zen temples in the late medieval Japan plays major roles in shogunate fiscal and manor control. So we considered how agricultural knowledge which formed one of their foundations had been accumulated and transmitted in the Zen temples. In the Zen temples many lectures on Confucianism and Chinese classics were conducted, and scientific knowledge such as mathematics and medical science and concrete knowledge such as literature and arts were secondarily instructed among them. Agricultural knowledge was one of the things taught in this way.

研究分野：日本中世史

キーワード：日本中世史 禅宗史 農業史 学問史 儒学 禅籍 漢籍 足利学校

## 1. 研究開始当初の背景

中世後期の社会において、とくに経済の面で五山系禅宗寺院が大きな役割を果たしてきたことは、早くから注目されてきた。その中でも、とくに禅宗寺院領については、荘園制の再編がすすむ室町期においても、他の寺社領などに比して強力な現地支配を実現していたことが指摘されている。その背景としては、幕府との関係などの政治的な側面とともに、東班僧と呼ばれる禅僧が実際に所領現地へ下向し、直務支配を行っていたことが指摘されている。しかし、そうした禅僧が下向することでなぜ現地支配を進めることができたのか、具体的な理由は必ずしも明らかにはなっていない。その理由の一つとして、荘園経営に関わる知識が禅宗寺院において共有され蓄積されているという点を以前に指摘したが(川本慎自「禅僧の荘園経営をめぐる知識形成と儒学学習」『史学雑誌』112-1,2003年)その蓄積された荘園経営に関する知識とはどのようなものであったのか、総体を明らかにするには至っていない。

従って、こうした荘園経営知識の具体的な内容の一つの例として、荘園における生産活動についての技術的な側面、とくに農業に関して、禅僧がいかなる知識を持っていたかを明らかにすることは禅宗史や学問史のみならず、社会史・経済史の側面からも意義をもつと考えられる。

中世後期は、二毛作や施肥など農業技術が大きく発達した時期であった反面、近世に多く見られる「農書」が存在していないことから、こうした農業技術がどのように継承されていったのかということは大きな問題となっている。この点については、木村茂光氏が断片的に栽培方法が記された「農書のメモ」の存在を指摘し、黒田日出男氏が田楽という形で栽培方法を口承で継承していくという指摘をしている。もちろん在地におけるこうした技術継承は重要な指摘であるが、現地に下向した禅僧などの「領主層」が生産に関する技術を在地に任せ、ただ年貢徴収だけで所領経営を貫徹していたとも考えにくい。禅僧たちは農業生産そのものについても、何らかの知識の関与を行っていたのではないだろうか。実際、禅宗寺院には中国元明時代の農書は残されており、中世禅僧はそうした中国の農業に関する書籍については触れる機会があったのである。

また、農業そのものだけでなく、農業生産にかかわる周辺の技術も中世後期には発展しており、その知識が寺院と関わっていることが指摘されている。例えば、禅宗・真言宗寺院が温泉や水利技術の伝播と深い関わりを持っていること、禅宗・律宗寺院が土工・石工集団を組織化し、各種の造作に大きな役割を果たしていることなどが挙げられる。こうした知識を蓄積していたことが、寺院領の強力な現地支配の背景として想定できるの

ではないだろうか。

そうした関心から、禅宗寺院における農業知識の一端として、室町中期の建仁寺僧江西龍派の抄物『杜詩続翠抄』に幕府奉公衆鞍智氏周辺から得たと考えられる近江の農業知識が見えることについては以前指摘したところであるが(川本慎自「江西龍派の農業知識」『アジア遊学』142,2011年)このような知識を、禅宗寺院総体としてどのように共有・蓄積していったのか検討し、中世後期の農業史や荘園史のなかで捉えなおそうというのが本研究の背景であり目指すところである。

## 2. 研究の目的

本研究の具体的な目的としては、「抄物」とよばれる一連の史料を調査研究することによって、中世の禅宗寺院にかかる農業知識の様相を明らかにすることである。

抄物は、中世後期に禅宗寺院や博士家などにおいて行われた漢学や禅についての講義についてその内容を筆記したもので、いわば講者の手控えや聞者のノートにあたるものである。こうした史料は、講義内容をそのまま口述筆記したものであることから、古くから国語学の資料として注目されてきた。しかし、具体的な講義の場において、具体的な講者から聞者へ伝達されたものであることから、一定の史料批判を行うことで歴史学の史料としても活用しうるものであり、とくに知識がどのように蓄積され伝達されていったかという様相を明らかにするには絶好の史料である。そして、先述の通り、そうした講義内容の中に農業などに関する実務的な知識も見えるのである。

こうした抄物史料については、上述の国語学における研究の成果として、柳田征司氏らによる網羅的な目録化が進んでおり、主たる史料は影印本として刊行されている。また足利学校や建仁寺両足院をはじめとする京都の禅宗寺院など、抄物を多数集積する所蔵者に関しては、大規模な科研組織による長期にわたる調査が行われている。本科研代表者も建仁寺両足院において2010年度まで行われた科学研究費基盤研究(B)「建仁寺両足院に所蔵される五山文学関係典籍類の調査研究」(研究代表者赤尾栄慶、2007~2010年度)による調査に参加している。一方で、抄物史料はこうした大規模寺院だけではなく、全国各地の中小の寺院や図書館などの機関に、一点・二点の規模で散在して所蔵されているものも多い。これは、記された抄物史料が転写や転売・譲渡を繰り返すことによって各地に伝播してゆくという、「知識の伝達」を目的とする講説史料ならではの特徴によるものであり、いわゆる文書史料とは伝来・所在の様相を異にしている。こうした散在する小規模の蔵書については大規模な科研組織による調査にはなじみにくく、個人あるいは数人

のグループで訪問して調査せざるをえないことを鑑み、本研究においては、全国に散在する小規模の蔵書を中心とした調査を行うとしたものである。

### 3. 研究の方法

こうした調査の方法としては、研究代表者の所属する東京大学史料編纂所に蓄積された史料探訪の方法を応用することを基本的な方針とした。史料編纂所はマイクロフィルムによる調査・撮影を長らく続けてきたが、近年、マイクロフィルムおよびCHペーパー印画紙の生産縮小・中止を受けて、デジタルカメラによる撮影・閲覧公開の方法を模索し、その手法が軌道に乗りつつある。そこで本科研においても、基本的にはデジタルカメラによる史料探訪の方法に則って調査・撮影を行った。

これらの調査を受けて、禅僧が関与する抄物史料における農業知識に関する記述を検出し、禅僧の農業に関する知識がどのようなものであったかを明らかにするという手順を踏んだ。さらに、その背景となる禅宗寺院における講義の具体像を探るため、周辺の文書・記録史料を参照し、禅僧の農業知識が武家・公家へ伝播してゆく様相を明らかにすることを目指した。

### 4. 研究成果

#### (1)抄物史料等の史料調査と研究資源化

上述の目的と方法に基づき、本科研においては、研究期間5年間を通じ計27件の史料調査を行った。調査先は禅宗寺院のほか、図書館等の各種所蔵機関、禅宗以外の寺社・個人など多岐にわたり、また調査史料としても、抄物史料を中心とした上で、周辺にまたがる様々な形態・分野の史料を併せて調査し、様々な角度から農業知識に関わる調査を行った。

これらの調査史料については、書誌学的手法に基づく調書を作成したほか、デジタルカメラによる撮影を併せて行った。調書の概要については『東京大学史料編纂所報』の当該年度の「史料探訪報告」に掲載しており、またデジタル撮影画像については、所蔵者の承諾を得られたものについて、史料編纂所図書室において閲覧公開を行っている。

またこれに付随して、史料編纂所の所蔵する禅宗関係史料のうち、これまでデジタル化されていなかった14点21冊(計1,191コマ)について、史料編纂所図書室および禅籍史料プロジェクト室の協力を得てデジタル撮影を行い、2017年4月より「所蔵史料データベース」で画像公開を開始した。抄物を含む禅宗関係史料の研究資源化により、禅宗史や学問史に関わる研究のますますの進展が期待される。

なお、今回画像公開を行った史料編纂所蔵史料14点の架番号・史料名・概要は以下のとおりである。

- 0109-1 禅徒雑記  
天文二十四年恵林寺にて書写。類書の抄写本か。沼田頼輔旧蔵、三上参次在職二十五年記念奨学資金購入図書。
- 0114-4 元亨釈書抜書  
天文七年日相書写。沼田頼輔旧蔵、三上資金購入。
- 0114-8 大燈国師下語并大応国師一拶  
宗峰妙超・南浦紹明の法語の抄写本。信濃真宗寺旧蔵。
- 0116-3 春林宗俶和尚等法語  
大徳寺98世。三上資金購入。
- 0116-4 帰周和尚語録  
帰周彦穎。但馬大明寺・円通寺関係。三上資金購入。
- 0116-6 藍溪和尚香語  
藍溪宗瑛。大徳寺152世。三上資金購入。
- 0116-8 諸老法語  
月舟寿桂、策彦周良、献甫光璞、惟杏永哲、彭叔守仙の法語。即宗院旧蔵。
- 0116-9 天瑞寺殿三七日忌香語  
玉仲宗琇による天瑞院(豊臣秀吉母)仏事の法語。三上資金購入。
- 0134-2 叢林文藻  
惟肖得巖、古幢周勝ほか多数の入寺法語など。三上資金購入。
- 0139-5 三体家法詩之抄下  
三体詩抄の零本。岡田真之旧蔵。
- 貴11-5 人天眼目抄 一~八  
春浦宗熙の手による『人天眼目』の抄物。『抄物大系』にて影印。
- 貴44-12 文明明応年間関東禅林詩文等抄録  
玉隠英瑛ほかの詩文集。
- 貴44-15 寅闇老漢遺藁・聴雨外集  
常庵龍崇・心田清播の詩文集。
- 貴33-3 相国寺日録  
天明七年。春屋妙葩・龍湫周沢の四百年忌を記載。

#### (2)禅籍・抄物史料の史料学的研究

これらの史料調査や研究資源化を踏まえて、史料に基づく研究を行った。とくに特記すべき調査史料としては、東北大学附属図書館狩野文庫所蔵『中叟和尚偈』が挙げられる。

同史料は、室町期の東福寺僧、中叟良鑑の偈頌集で、東福寺正光庵旧蔵のものである。当該期の東福寺周辺の様々な僧俗へ与えた画賛や道号頌が含まれており、比較的史料の少ない応永・永享期の東福寺の様相を示す史料として重要である。とくに、禅宗寺院において経営面を司る東班僧に関する記述が見られることが注目され、たとえば備中国上原郷の荘主として下向した納所永広の道号が本史料から判明する。そのことにより永広と備中国現地との関わりを明らかにし、東班僧

が莊園現地においてどのような知識・情報を得ていたかという点について考察することが可能となった(論文 )。

なお、同史料には中叟良鑑と山名時熙との関わりを示す記述も多く含まれており、莊園経営の知識形成のみならず、禅宗寺院と大名クラスの勢力との関わりがどのような意味を持っていたのか、新たな知見をもたらすものと期待されるものである。本科研の調査研究をきっかけとして、同史料は2017年3月発行の『新鳥取県史 資料編 古代中世 2』にも収録された。

### (3)禅宗寺院における科学知識形成の研究

上述の史料調査および史料研究を踏まえて、禅宗寺院における農業知識のあり方についての研究を行った。

本科研による史料調査は、農業知識に関する抄物史料を索検することを目的としているが、農業知識が含まれているか否かは史料の内容を詳細に検討してはじめてわかることであり、史料調査の段階では、所蔵先に所在する禅宗関係史料を悉皆的に調査することとなった。

その結果、調査をすすめるに従い、禅宗寺院における知識関係の史料のなかには、仏典教学に関する史料が含まれるのは当然として、その他に禅宗と密接な関係をもつ儒学・漢学関連史料を中心として、周辺に様々な知識を示す史料が所在するという構造が明らかになってきた。

たとえば、『周易』命期経の理解にあたっては、数学的な計算を行うことが必須となるが、その講義を禅宗寺院内で行うにあたっては計算方法から解説が行われており、桃源瑞仙による講義記録である『易抄』には算木の運用法が具体的に図解される形で示されている(論文 )。

また、月舟寿桂の『三体詩』講義においては、中国の民間歌謡をもとにした詩歌形式である竹枝詞を解説するにあたり、日本の東国で歌われた民間歌謡である麦搗歌・鎌倉節を参照する形で解説が行われている。これは月舟の講義に聴衆として三条西実隆や山科言継が出席していたことを念頭においてのものであり、実隆や言継が京中での風流踊歌の制作に関与していたことから、聴衆の関心に応えて、踊歌制作の参考となる具体的な農事歌の情報を伝えようとしたものと考えられる(論文 )。

このように、禅宗寺院における講筵の場においては、儒学・漢学の講義に付随する形で、聴衆の関心に応じて様々な実用的知識、とくに医学や数学といった科学知識、そして文学や芸能に関わる具体的故事や事象の情報が伝達されていたのであり、農業知識の伝達と形成もそうした文脈のなかで行われていたものの一つであったと考えられるのである。

さらに、こうした知識伝達の場合は、上述の

桃源瑞仙や月舟寿桂が活躍した京都の五山寺院にとどまるものではなかった。こうした五山僧の背景には、法系・学系に裏打ちされた広域的な人脈が存在しており、東国の足利や常陸・鎌倉・伊豆、そして但馬・越前・備中・備後など、様々な地域の寺院や禅僧と交流を持つことによって知識が形成されていた。とくに本科研では足利学校に着目し、そこで生みだされた具体的知識がどのように京都や鎌倉など各地に波及したかを考察したが(論文 )、上述の月舟寿桂の『三体詩』講義で東国の農事歌の知識が伝達されているのはその事例の一つである。

こうした観点から、農業知識の伝達と形成の構造を明らかにするために、禅宗寺院の講義のあり方全体、例えば講義の場や聴衆、講義の内容と目的といった点から考察する必要があると考え、とくに研究期間の後半には、中世における漢籍受容の様相や、禅宗寺院における典籍学習のあり方を概観する研究を行った(論文 )。

こうした研究によって、禅宗寺院における科学的知識や実用的知識の全体像を明らかにした上で、その中で農業知識のあり方を位置づけることができたものと考えている。

## 5. 主な発表論文等 (研究代表者には下線)

(雑誌論文)(計11件)

川本慎自「研究動向 漢籍交流史の現在 日本中世における受容の視点から」(『歴史学研究』927号、2017年、p. 19-27) 査読有

川本慎自「禅宗寺院における典籍学習のかたち」(『益財団法人佛教美術研究上野記念財団研究報告書 43 日本国内における禅宗文化の受容と伝播』2016年、p.1-8) 査読無

川本慎自「月舟寿桂と東国の麦搗歌」(天野文雄編『禅からみた日本中世の文化と社会』ペリかん社、2016年、p.317-331) 査読無

川本慎自「禅僧の数学知識と経済活動」(中島圭一編『十四世紀の歴史学 新たな時代への起点』高志書院、2016年、p.59-82) 査読無

川本慎自「中世禅宗と儒学学習」(『歴史と地理』687号、2015年、p. 33-42) 査読無

川本慎自「足利学校と伊豆・常陸・鎌倉」(『史跡足利学校研究紀要 学校』13号、2015年、p.3-35) 査読無

川本慎自「室町時代の鎌倉禅林」(村井章介編『東アジアのなかの建長寺』勉誠出版、2014年、p. 294-303) 査読無

川本慎自「足利学校の論語講義と連歌師」(高橋秀樹編『生活と文化の歴史学4 婚姻と教育』竹林舎、2014年、p. 427-445) 査読無

川本慎自「室町幕府と仏教」(『岩波講座日本歴史 8 中世 3』岩波書店、2014年、p. 227-256) 査読無

川本慎自「『中叟和尚偈』と室町期東福寺の東班僧」(『東京大学日本史学研究室紀要別冊 中世政治社会論叢』2013年、p. 245-257) 査読無

川本慎自「光明寺と二つの宝積寺」(『夢窓疎石と鎌倉の禅宗文化』神奈川県立歴史博物館、2012年、p. 46-55) 査読無、『津久井光明寺』神奈川県立金沢文庫、2015年、p. 8-16) に増補再掲

〔学会発表〕(計7件)

川本慎自「禅宗と儒教」鎌倉禅研究会、2016年12月15日、建長寺(神奈川県鎌倉市)

川本慎自「禅宗寺院における典籍学習のかたち」仏教美術研究上野記念財団研究発表と座談会「日本国内における禅宗文化の受容と伝播」、2016年5月4日、京都国立博物館(京都府京都市)

川本慎自「津久井光明寺と幻の禅院・宝積寺」特別展『津久井光明寺』記念講演会、2015年2月28日、神奈川県立金沢文庫(神奈川県横浜市)

川本慎自「足利学校の論語講義と連歌師」室町期研究会、2014年7月18日、明治大学(東京都千代田区)

川本慎自「足利学校と伊豆・常陸・鎌倉」足利学校アカデミー、2014年6月28日、足利市教育委員会史跡足利学校事務所(栃木県足利市)

川本慎自「『中叟和尚偈』にみる東福寺僧と山名時熙の交流」宗教が文化と社会に及ぼす生命力についての研究第6回研究会、2013年2月17日、国際高等研究所(京都府木津川市)

川本慎自「室町期における鎌倉禅林」鎌倉禅研究会、2012年6月21日、建長寺(神奈川県鎌倉市)

〔図書〕(計3件)

義堂の会(榎本渉・臼井和樹・呉座勇一・木下聡・小瀬玄士・細川武稔・白川宗源・川本慎自・岡本真)編『空華日用工夫略集の周

辺』義堂の会、2017年(共編、担当範囲:「義堂周信の「吾家」」p.137-152 および編集)

東京大学史料編纂所編『日本史の森をゆく』中央公論新社、2014年(分担執筆、担当範囲:「中世の赤米栽培と杜甫の漢詩」p.188-192)

山家浩樹編『週刊朝日百科 新発見日本の歴史 25 室町時代4 日本文化の源流の実態』朝日新聞出版、2013年(分担執筆、担当範囲:「五山僧の学問」p.16-18)

〔その他〕

・新聞報道

読売新聞 2017年2月1日朝刊 文化面「変わる「室町」観」

朝日新聞 2016年6月23日夕刊(大阪本社版)「禅宗 = お役立ち知識・新時代」

神奈川新聞 2015年3月23日朝刊 文化面「幻の宝積寺 津久井光明寺展」

読売新聞 2013年11月1日朝刊 広島地域面「道三自筆の医書東大助教ら調査」

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川本 慎自 (KAWAMOTO, Shinji)  
東京大学・史料編纂所・准教授  
研究者番号: 30323661